

〔共同研究：経済開発の理論と現実 II〕

翻 訳

## 自主管理社会主義の政治経済学は可能か？（1）

イヴィツア・ストヤノヴィッチ著  
上 野 勝 男 訳\*

## 目 次

翻訳紹介にあたっての訳者解説

## 序 論

1. 政治経済学にたいするマルクスの関係についての見解
  - 1.1. 政治経済学における実証主義者としてのマルクス
  - 1.2. 政治経済学における批判者としてのマルクス
  - 1.3. 政治経済学における実証主義者かつ批判者としてのマルクス
2. 自主管理社会主義の政治経済学の研究対象を定義できるか否かについての見解
 

……以上 本号

……以下 次号
3. 自主管理社会主義の政治経済学は可能か？
4. ミラディン・コーラッヂとアドルフ・ドラギチェヴィッチの自主管理社会主義の政治経済学についての見解
5. 結論的考察

翻訳紹介にあたっての訳者解説

以下に紹介するのは、イヴィツア・ストヤノヴィッチ著『自主管理社会主義の政治経済学は可能か？』(Ivica Stojanović, DA LI JE MOGUĆA POLITIČKA EKONOMIJA SAMO-UPRAVNOG SOCIJALIZMA?, Istraživačko-izdavački centar SSO Srbije, 1987.) の全訳である（参考文献表や表紙扉の引用文など一部を省略した）。訳出にあたって、若干の解説的コメントをくわえる。

本書は、旧ユーゴスラヴィア（セルビア）の研究者による著作である。原著はセルビア語で書かれているが、全体でも73頁ほどの「小品」である。著者ストヤノヴィッチは、現在ベオグラードにある国際政治経済研究所のスタッフである。しかし、本書の出版の時期（1987年。た

だし執筆は1982年とされている）にどのような職にあったのか、またこれまでの研究歴などについてはいまのところつまびらかにしない。

さて、かつてソ連では、自国の経済体制の経験を総括するというだけではなく、さらに積極的に、人類史から見て資本主義につぐ社会構成体としての社会主義の経済を學問的体系として表示する「社会主義経済学 a political economy of socialism<sup>i)</sup>を構築しようとする試みが盛んであった。よく知られているように、こうした試みのパイオニア的位置を占めたのが1954年に出版されたソ連科学アカデミー経済研究所による『経済学』（一般に『経済学教科書』呼ばれる）の社会主義経済篇である。その後も、いくつかの代表的試みがわが国にも紹介されている。しかし、1989年から1991年にかけての東欧および

i) 本書翻訳にさいしては、《a political economy》に相当する原語をすべて「政治経済学」と訳している。

\* 本学経済学部

ソ連の旧体制の崩壊後は、社会主義の経済についての「学的一般体系」をうち立てるといった文献を目にすることはまずなくなったのではないだろうか。だが、これは少々奇妙なことだといわねばならない。たしかに、社会主義を自認してきた体制（のいくつか）が消滅した事態は、「経験科学」としての経済学にとって研究対象そのものの消滅を意味しかねない。しかし、注意しなければならないのは、そもそも「社会主義経済学」とは、ソ連などの「社会主義」国の経済建設の経過を経験的対象としてたんにそれを総括するものとして構想されたのではなく、そうした経験的枠を超えて、社会構成体としての社会主義の経済についての「学的一般体系」をうち立てようとする、「それじたいとしては純理的な性質のものであって、『社会主義』体制が崩壊したからといって論理に突然の旋回が生まれたり、学そのものが一夜にして消滅するわけではないはず」<sup>ii)</sup>のものだった。にもかかわらず、いまでは杳として姿を見いだせなくなったのは、やはりそれらの試みに重大な誤り・欠陥があったからというほかあるまい。ストヤノヴィッチの本書を紹介するのは、まさにこの「社会主義経済学」構想が挫折するほかなかったのはなぜかを解明することとかかわってのことである。

旧ユーゴスラヴィアは、これもよく知られているように、1948年のコミニフォルム＝スター・リンの大主義的干渉を経験して以来、ソ連イコール「社会主義そのもの」という既成観念に正面から挑戦するものとして、そして自己認識においてはマルクスらの本来の社会主義の理念にそるものとして、労働者自主管理の社会主義建設の道を歩みつつあると考えられてきた。だがその40年あまりの試みは、1990年代には連邦の解体と凄惨な諸民族間の戦争のなかでうち捨てられて、忘れ去られていった。なぜ、どうしてそのような結末を迎ねばならなかったのか、その徹底した解明はきわめて重大で切実な現代

ii) 拙稿「『社会主義経済学』の成立可能性について（上）」『桃山学院大学経済経営論集』第39巻第1号、27頁。

の社会科学的課題である。だが、ここは直接にそれに取り組む場所ではない。本書の紹介は、あえていえば、こうした重い課題の解明にたどり着くための「学問的な迂回」の一歩だということである。

「工場を労働者へ」というスローガンの実践としてはじめられたユーゴスラヴィアの労働者自主管理は、ソ連流の「社会主義」への強烈な対抗意識に支えられて理論探究という点でもユニークな試みを生み出していった。すなわち、労働者による自主管理こそがマルクス主義の本来の社会主義理念にかなうものであり、普遍的意義をもつものであるとして、そのような見地から、「自主管理」をより普遍的一般的な文脈のなかに位置づけて展開しようとする理論活動が活発におこなわれた。経済学分野では、「自主管理社会主義の生産様式」についての経済学を構築することは可能でもあり、必然的なことでもあるといった議論が繰り出される。本書で主たる検討対象として取り上げられているミラティン・コーラッヂがその代表的理論家のひとりとみなされていた<sup>iii)</sup>。

従来、ユーゴスラヴィアの「自主管理社会主義の経済学 a political economy of self-management socialism」、とりわけ上記コーラッヂの理論は、ソ連の「社会主義経済学」に根本的に対抗するものだという理解が強かった。しかし、その誤り・欠陥という点からみて、両者はまったく異質なものというよりむしろ同質性をもっているといえる。たしかに、労働者自主管理の強調、社会主義での商品生産の存在（続）の肯定などは、ソ連の「社会主義経済学」と比較して顕著で重要な違いである。また、ストヤノヴィッチの本書によても、ソ連とユーゴスラヴィアの議論のあり方に一定の重要な相違があることを容易に看取できる（とくに、ユーゴスラヴィアの「社会主義」が本当に社会主義なのかを公然と議論するというのは、ペレストロイカ以前のソ連ではおよそ想像外のことであった）<sup>iv)</sup>。にもかかわらず、社会構成体としての社

iii) コーラッヂの邦訳書として『自主管理の政治経済学』（山崎洋訳、日本評論社、1982年）がある。

会主義における経済の学問的一般的体系を構築できるという、いわば方法論の中核部分においては、どちらもまったく同じ発想に立脚していたのであり、また、その体系の展開がマルクスの『資本論』の理論展開をそのまま引き写したものとなっていることも共通している。実は、この共通した発想と展開の方法こそが、マルクス・エンゲルスの思想と理論から見て重大な問題、誤謬を含んでいるのである。二つの点をごく簡単に指摘しておく<sup>iv)</sup>。こうした発想や展開では、第一に、マルクス主義の三つの構成部分（哲学、経済学、社会主義）といわれるものうち、「経済学」と「社会主義」の関係について、社会主義（の一般的抽象的規定）が経済学のなかに流し込まれることで、経済学と社会主義の区別と連関が曖昧になり、経済学、とりわけいわゆる「広義の経済学」が無内容な抽象物に変形させられてしまうことである。第二には、現実のソ連やユーゴスラヴィア社会を、あれこれの特徴づけを付与された限定的なものであったりするが、結局のところは社会主義と等置することで、「社会主義とは何か、どう把握すべきなのか」という相対的独自性をもった問題領域（とりわけ社会主義の一般抽象的規定と移行の具体的歴史的規定の混同の問題）が実質的には雲散霧消させられてしまっていることである。

ただし、ここに紹介するストヤノヴィッチの本書が、上記と同じような角度から「自主管理社会主義の経済学」の問題点をえぐり出しているわけではない<sup>vi)</sup>。そこで次に、本書の「見取り図」を示し、ストヤノヴィッチの議論の特徴（問

iv) さらに蛇足を加えれば、コーラッチに代表される「自主管理の社会主義経済学」の潮流が、日本での紹介されぶりとは案に相違して、ユーゴスラヴィアの経済学者の間でもっとも有力な「学派」であるというわけでは必ずしもなかった。そして、もちろん、そうした学界での支持者の多寡が検討の俎上にのぼせるさいの基準となっているわけではないことは言うまでもない。

v) なお、詳しくは前掲拙稿参照。

vi) とくに、『経済学教科書』をはじめソ連の学界ではひろく議論されていた、エンゲルスの『反デューリング論』におけるいわゆる「広義の経済学」と「社会構成体としての社会主義の経済学」の関係をめぐる問題には、まったく言及されていない。

題点）に言及しておこう。

ストヤノヴィッチはまずはじめに、「自主管理社会主義の経済学（以下、『politička ekonomija samoupravnog socijalizma』という原語の一部をとって PESAMO と略記する）」をめぐる議論が、それが構築可能だとする議論から、まったく不可能であるという対極にくるものまで大きく分岐していることを指摘し、議論の焦点をなす二つの問題を引き出す。すなわち、第一に、PESAMO の方法的基準としてのマルクスの経済学の性格をめぐる問題である。PESAMO の構築可能性にどのような見解をもつかにかかわりなく、方法的基準をなすのはマルクスの経済学であるという点では見解の一致をしている。だが、そのマルクスの経済学の性格が批判かそれとも実証主義か、その見方次第で、PESAMO の可能性への回答もちがってくるというのである。第二の焦点は、PESAMO の研究対象の規定可能性をめぐる問題である。これは、自主管理的な社会主義もしくは社会主義の存在をどうみるかによって、研究対象の有無の、したがって PESAMO の構築可能性の判断が異なってくるというものである。

ストヤノヴィッチは、続く二つの章で上記のそれぞれの焦点をめぐる議論をさらに整理している。そして、第3章で自分自身の積極的見解を述べ、さらに第4章では、前章でえられた見地にもとづいて、ひるがえって PESAMO の構築可能性に肯定的な二人の代表的理論家の見解を批判的に検討する、という具合に論述を進めている。

このうちストヤノヴィッチが、主観的にはもっとも精力を傾注しているように思えるのが、第一の焦点であるマルクスの経済学の性格の解説である（主として第3章第1節）。とりわけ、マルクスの経済学を実証主義に引き下げようとする一面的傾向に対して、「主体性としての人間の感性的活動、実践としての現実」という認識を中心においた、マルクスの立場の「哲学的基礎」にまで戻って批判を展開していることが特徴である。このなかで、コーラッチの提唱する PESAMO について、それが「政治経済学に対す

るマルクスの態度を適用させてはいない」ものであり、「マルクスの政治経済学的思考にもとづけば、マルクス主義的社会主义政治経済学などをけっして構成できるものではなく、「社会主义政治経済学はマルクスの哲学上の立場にもとづき、そして彼の政治経済学研究に対する方法論的アプローチにもとづいてこそ構成できるものである」と結論づける(下線は引用者による)。

これと比較すると、第二の焦点について(主として第3章第2節)は、分量の面でもずいぶん見劣りがするし、論旨としてもいささか歯切れが悪い。ストヤノヴィッチは、結論的に言って、「経済的社會構成体としての自主管理社会主义が政治経済学の研究対象である」という主張に否定的である。研究対象に設定しようとすれば、「社会主义が静態的な何か閉じられたものであり、社会経済的及び政治的諸関係の不斷の変化の過程ではない」という誤った理解につながるという理由からである。しかし、ユーゴスラヴィアが標榜する「社会主义がはたしてマルクスの意味における社会経済的及び政治的構成なのか」という問題に対する「態度決定は回避されて」、棚上げにされている。なぜそうするかと言えば、ひとつには、そのような議論では社会主义をめぐってスコラ的な水掛け論におちいつてしまふ危険があるからである。また、経済学がユーゴスラヴィア固有の社会的経済的現実を認識できるようになるために、とりわけその現実のなかで「搾取関係」が踏み越えられているのかどうかを実際に認識できるものとなるために、「現に生活がおこなわれているところに『着地』させなければならない」からである、という。

社会主义をめぐる問題についての態度決定の回避は、一方で、PESAMOの構築可能性にきわめて否定的であるという立場を鮮明にさせておきながら、他方では、不用意とも一貫性を欠くとも考えられる仕方で各所で「自主管理社会主义の経済学」ないし「社会主义経済学」を構築できると述べている点にも現れている(下線は引用者による)。こうした見解は、政治的な顧慮からの「態度決定の回避」がありうるというこ

とを別にすれば、PESAMOを社会主义の抽象的定義にこだわるスコラ的議論から現実(の批判的)分析の武器に変えなければならないとする、それ自体として積極的な意図からでてきてている。だが、「回避」は成功しているだろうか。

例えば、経済学の課題として、ユーゴスラヴィアの現実のなかで「搾取関係が……踏み越えられているかどうかを認識すること」が提起されている。だが、この提起は、数ある問題、課題のなかで「なぜ搾取関係なのか」という疑問にいっさい答えておらず、なんの脈絡もなく唐突に出されたという印象をまぬかれない。もちろん、搾取の克服は重要な問題であることは間違いない。しかし、何故、どんな視点に立ってそういうえるのか。批判的な経済学の立場からは、資本主義の搾取の存在と問題を指摘することはできるとしても、その本質を解明しこれを克服しなければならないという観点は自動的に導かれてくるものではない。階級的搾取の克服、したがって階級対立の廃絶とは、なによりも被搾取階級であるプロレタリアートの根本要求であり、社会の社会主义的変革=新しい社会の創造とかたく結びついた問題である。したがって、「社会主义」との関連を抜きにしては出てこようのないテーマであった。

また、「ユーゴスラヴィアの戦後の社会経済的及び政治的現実の政治経済学的分析は、資本主義的生産様式の分析に際してマルクスのとった方法論と、そして俗流及び古典派経済学に対する仮借ない批判を首尾一貫して利用しなければならない」という。「仮借ない批判」を首尾一貫させるには、たしかにマルクスの哲学的基礎に立脚することがまず必要であろうが、それだけでは十分といえない。マルクスが資本主義に対して「仮借ない批判」を一貫させた、すなわち、「この生産様式はそれ自身の発展によってみずからを不可能とする点に向かってつきすんでいるということ」、「資本主義的生産様式の内部で生みだされた大量の生産力は、この生産様式の手ではもはや制御できないようになっているが、計画的な協働をおこなうように組織された社会がこれを掌握しきさえすれば、社会のすべ

ての成員に生活手段と彼らの能力を自由に発展させるための手段を保障できるし、しかもたえずますます大量にそれを保障できるということ」を証明したのは、それが「資本主義的生産様式の社会主義的批判」<sup>vii)</sup>（下線は引用者による）に立ってなされたからにはほかならない。マルクスの方法を「首尾一貫させて利用しなければならない」とするならば、やはり「社会主義とは何か、どのように把握すべきなのか」を明確にすること、なかんずく、社会主義の一般的抽象的規定にとどまるのではなく、またそれへの一方的埋没やそれとの混同におちいることなく、ユーゴスラヴィアの現実に即した「社会主義への移行形態」<sup>viii)</sup>の具体的歴史的な規定性を明らかにすることは避けて通れない課題である。つまりは、「態度決定」は回避できないのである。

この点で、ストヤノヴィッチがコーラッヂの議論を検討するなかで（第4章）、社会革命と資本主義の「自然的消滅」の関係について言及しているが、これはすこぶる興味深い。すなわち、ユーゴスラヴィアでは資本主義的生産様式が発展のピークにも達していなかったのに、特有の歴史的理由から革命が起きた。この場合、「社会的変革ははたして資本主義的生産様式を無理やりに中断させうるのか、そのことによって、マルクスが言うように『人類社会の前史が終わりを告げ』、そして人類の本史が始まるのか」という問題が提起される。ところが現実には、「資本主義的生産様式の一定の諸形態が、社会主義においてもさまざまな形式で存続し」ており（下線は引用者による）、「わが国の実際の経済問題

vii) エンゲルス『反デューリング論』、国民文庫版（村田陽一訳）、302-303頁。

viii) 私は、旧ソ連をはじめ現在の中国も含めて「社会主義」国は、社会主義をめざそうとした体制であった（ある）と言えても、社会構成体としての社会主義に到達した（入った）ものとは考えていない。また、社会主義への移行期、いわゆる過渡期を経たのか、あるいは経つつあるのかという点についても、否定的である。それゆえ、「社会主義への移行形態」の具体的歴史的規定こそが何よりも徹底して解明されなければならないと考える。しかし、ここではこれ以上私見について立ち入って論じることはしない。

を考えるならば、それらは資本主義世界の諸問題と同じではないにしても似かよっているといえる。インフレ、失業、スタグフレーション、過重債務などは、20世紀の80年代にはわが国でも資本主義世界でもよく知られたものである」と述べる。つまり、ここでストヤノヴィッチは、彼の主観的意図はともかくとして客観的にみて、「ユーゴスラヴィアなど社会主義を名乗る国々の社会主義たる根拠はいったい何に求められるのか」という問い合わせを発しているのであって、上記の「社会主義とは何か、どのように把握すべきなのか」の問題に踏み込んでいると評価できるのである。

しかし、理論的探究はこれから先にはなかなかすさまない。現存の体制はそれでもなお「社会主義」と規定されている。そして、上の引用に続く部分では、「マルクスが、生産諸力と生産諸関係のあいだで現状の変革を求めるほどの矛盾にいたると、そのときに社会革命が起きる」と主張したのは正しくはなかった。今日までの社会発展の歴史は、社会革命はずっと早い時期に起きることを示した」として、20世紀の革命の特殊性（「全能の舞台監督」であった世界戦争、後進国革命の問題など）を十分に吟味しないままに、「社会主義」がいわば資本主義を抱え込んでいる現状は、マルクスの理論的誤りを示すものだとして問題の方向をずらしてしまっている。

以上のような重要な問題点があるにもかかわらず、ここに本書を紹介するのは、なによりもストヤノヴィッチが、「自主管理社会主義の経済学」もしくは「社会主義経済学」の構築可能性に対して正面切って疑問を提起し、一定の批判をなしえているからである。そして、このような仕方で問題を提示することで、「経済学と社会主義の関係」「社会主義とは何か、どう把握すべきなのか」という問題視角と共に鳴る議論が、すでに指摘したように自覚的明示的なものではないとはいえ、掬すべきものとして浮かび上がってきたからである。

## 序論

PESAMO の構成可能性に賛成か反対かをめぐる場合ほど、研究者たちの考えが異なるようなことは〔他の〕学問諸分野ではおそらくまれであろう。立場の違いは、「PESAMO が可能であるかどうかについてジレンマは存在しない」<sup>1)</sup>とし、それゆえ PESAMO のための最初のスケッチを描いている理論家から、「自明のことのように社会主義の政治経済学〔以下 PESOC と略す〕についておしゃべりしている思想家もいる」<sup>2)</sup>と皮肉って述べるものにまでわたる。何が問題なのか。なにゆえ PESAMO の構成可能性に賛成と反対に分かれるのか。

M・コーラッチの考えるところでは、「マルクスの『資本論』の副題、そこには政治経済学批判とあるが、それについての議論を想起するのが有益であろう……。」「よく知られているように、マルクスは主として『剩余価値学説史』で、ブルジョア（古典派および俗流）経済学を明示的に批判したが、『資本論』そのものでは散発的にとどまった。この点からみると『資本論』の副題は妥当なものではないようにみえる。」それゆえ、「『資本論』では、実証的な意味で資本主義の政治経済学が展開されている」<sup>3)</sup>のとする見地がだされる。だが他方で、ジャルコ・プロホーヴスキイは次のように問う。「マルク主義政治経済学が『資本論』によって生まれたというならば、『資本論』のどこで商品、市場あるいはその他のことについて実証的に語られているのかを示さなければならぬだろう。」<sup>4)</sup>

ミロエ・ペトロヴィッチによれば、マルクスは政治経済学批判という副題によって、政治経済学の体系を直ちに提示しようとしたのではな

1) ミラディン・コーラッチ「PESAMO をどう構築すべきか」、『マルクス・イ・サヴレメンノスト（マルクスと現代）』誌（以下①と略す）No.8, 1975, 143頁。

2) ジャルコ・プロホーヴスキイ「科学とその対象」、『クルトゥールニ・ラードニク（文化労働者）』誌（以下②と略す）No.5, 1976, 74頁。

3) ミラディン・コーラッチ、前掲論文。

4) ジャルコ・プロホーヴスキイ「現実的な社会改造の把握について」、①, No.8, 1975, 157頁。

く、むしろ現存の経済諸関係の批判を、したがって、市民世界の現存の機構の批判を行おうとしたのである<sup>5)</sup>。ヴェコスラヴ・ミケツィンは次のように強調する。「マルクスはいかなる政治経済学も書いていないし、それは彼の意図でもなかった。彼は市民世界の弁護論的な疑似科学を批判にさらしたものであり、そこから『資本論』の副題が出てきたのである。」<sup>6)</sup>

この分野の文献をみたところでは、次の二つの点では一致をみていると結論できる。第一に、マルクスはブルジョア的古典派および俗流経済学を批判にさらしたこと。第二に、マルクスは疎外された市民世界と資本主義的生産様式をも批判したということである。意見が食い違ってくるのは、マルクスが資本主義的生産様式の批判だけにとどめたのか、それとも批判とともに実証的な意味でそれを叙述したのかの評価をめぐってである。このどちらの立場に立つかによって、PESAMO の構成可能性に対する立場も変わる。マルクスが批判だけにとどめたとすれば、マルクス主義的な資本主義の政治経済学も、同時に社会主義のそれもありえない。また、批判とともに実証的な意味で資本主義的生産様式を叙述したのであれば、その反対である。この主張を証明するのに次のM・コーラッチとM・ペトロヴィッチの議論が役に立つ。コーラッチの考えでは、マルクスは批判とともに、実証的な意味で資本主義的生産様式を叙述したのであり、それゆえに、「われわれにはすでにマルクス主義の資本主義政治経済学があるのだ。すなわち、社会主義的な自主管理社会の政治経済学を創造することから始めることが必要なのである」<sup>7)</sup>と結論づける。ペトロヴィッチは、「マルクス主義の政治経済学は、なによりも市民世界の批判として可能」なのであり、「PESOC について」語ることは、「すなわち、移行期の社会について語ることであり、その社会の接頭辞である

5) ミロエ・ペトロヴィッチ「マルクス主義政治経済学の可能性」、①, No.8, 1975, 153頁。

6) ヴェコスラヴ・ミケツィン「『マルクス主義政治経済学』をめぐるいくつかの疑問」、②, No.5, 1976, 10頁。

7) ミラディン・コーラッチ、前掲論文。

社会主義的というのは、ここでは市民世界の関係、構造においてやはり何かが変化したことを探論的に意味している。」<sup>8)</sup>

したがって、反対に、「『資本論』は資本主義の政治経済学であって、たんに市民世界の政治経済学のマルクス主義的批判だけではないと理解するならば、PESOC が可能なのはたしかである」とスティーペ・シューヴァルはいう。

S・シューヴァルは、「マルクスがいう意味での経済的社会構成体ではないような、そんな社会で政治経済学が存在しうるのかどうか」という問題も提起している。彼によれば、それは社会主義には存在しない。「自主管理社会主義は何らかの社会システムとして存在しているのではなく、自由な連合労働の経済が存在するような社会へ向かう運動の諸傾向が重要なのであって、自由な連合経済が実現されるとすれば、それは共産主義である。」それゆえに、「社会主義が首尾一貫した社会ではなく、自分自身の自然的基礎もつ社会ではないのでだから、首尾一貫したPESOCなどはありえない」<sup>9)</sup>とシューヴァルは結論づけている。

ドラゴエ・ジャルコヴィッチの考えでは、シューヴァルと同じように、「コーラッчиが社会主義的自主管理的生産様式の名のもとに理解しているもの（『社会主義的自主管理的生産様式の内容をなすのは、社会的再生産過程のなかで労働者が連合し、たがいに結合することであり、それは人々のあいだの諸関係を含めてその過程を、その同じ労働者たちの側から意識的に規制する目的でなされる。』ミラディン・コーラッチ著『社会主義的自主管理的生産様式』第Ⅰ巻35頁、コムニスト社刊、1977年）は、共産主義的生産様式であり、それはわが国よりはるか先であり、全人類のはるか先のことである。共産主義の政治経済学は、共産主義が現実となるよりも以前に展開できるのだろうか？」とジャルコヴィッ

8) ミロエ・ペトロヴィッチ、前掲論文、153、154頁。

9) スティーペ・シューヴァル「社会主義は過渡期の社会である。それは資本主義でもあり共産主義でもある。」①、No.8、1975、150、151頁。

チは自問して、「いやそれはできない」<sup>10)</sup>という。ジャルコヴィッチによれば、社会主義的自主管理生産様式は、コーラッчиが定義づけたようなものとしては社会主義では存在しない。それはつまり、PESAMO も存在しえないということである。

シューヴァルとジャルコヴィッチのこうした理解に対して、ジャルコ・パーピッチとミロヴァン・パーヴロヴィッチはきわめて精力的に反論した。M・パーヴロヴィッチは、PESAMO の生成を、「社会的再生産過程における労働者の連合と結合の過程の強化（それは周知のように、共産主義ではない）」と結びつけており、「社会的生産を組織する新しい歴史的形態の性格と法則を認識し、したがって発見することにも」結びつけている。それゆえ、彼は次のように考える。「社会主義的自主管理生産様式の生成過程について、共産主義社会と同じように語りうるとするならば、はたして PESAMO はそもそも可能なのかといった批評や問いかけが当たっていることになろう。」<sup>11)</sup> Z・パーピッチは次のように主張する。「はたして PESAMO は可能なのかそれともそうでないのかに関するこうした論争の背後には、その他の論争もそうであるように、基本的に次の点についての考え方の違いがある。すなわち、そもそも自主管理とは何かをめぐる問題にさいしての違いと同様に、はたして自主管理は社会主義の発展において一般的法則性であるのかそれともそうでないのかをめぐる違いである。」<sup>12)</sup> パーピッチのジレンマを、パーヴロヴィッチが次のような命題によって解決している。「社会主義的自主管理は、社会主義発展の一般的法則性である……したがって、社会主義社会の政治経済学は、この過渡的状況の諸

10) ドラゴエ・ジャルコヴィッチ「社会主義的自主管理社会の政治経済学に関する批判的考察」、『ソツィヤリザム』誌（以下③と略す）No.4、1979、126頁。

11) ミロヴァン・パーヴロヴィッチ「社会主義的（自主管理的）社会の政治経済学の構築可能性と必然性」、③、No.6、1980、129、130頁。

12) ジャルコ・パーピッチ「自主管理は可能なのか」、③、No.12、1979、85頁。

現象と経済諸法則にたずさわらなければならぬ、と論理的には結論づけられる。」<sup>13)</sup>

パーピッチとパーヴロヴィッチの考えでは、社会主義的自主管理は社会主義発展の法則性であり、それは、PESAMO は可能だということを意味する。

コーラッヂにとって、その答えるいかんで、PESAMO が可能であり必要でもあるかどうかに対する回答もきまるような第一級の問題とは、「はたして自主管理社会主義において、人々は、必然的かつ自分の意志からは独立して、一定の相互諸関係、すなわち生産関係のなかにはいるのか、また、そうした自主管理生産諸関係はどこかの国で実際に実践として存在しているのか？」ということである。「少なくともマルクス主義者にとっては、自主管理社会主義（つまり、自分自身の土台にもとづいて発生していない、共産主義社会の低い段階）においても、人々が自分の意志とは独立に一定の諸関係に入らなければならない、ということは争う余地がないに違いないだろう。この一定の諸関係とは自主管理的生産諸関係以外のものではありえない。これとの関連で、重要な問題は、そうした自主管理生産諸関係はどこかすでに存在しているということである。」<sup>14)</sup>

コーラッヂにとっては、PESAMO を構成する可能性は、以下の二つの問題に対する答えにかかっている。すなわち、1) 人々は自主管理社会主義において、必然的かつ自分の意志からは独立して一定の相互諸関係に、すなわち生産諸関係にはいるのかどうか、2) 自主管理的生産諸関係はどこかの国の実践で実際に存在しているのかどうかである。彼は第 1 の問題に肯定的に答えているが、第 2 の問題に対する答えでは、「ユーゴスラヴィアはいまのところ次のような点で世界で唯一の国である。つまり、その経済システムでは労働者の自主管理の実践の展開によって自主管理的生産諸関係が識別されはじめ、また、それをその他の生産諸関係とは違わせている若干のその本質的特徴がよりはっきり

13) ミロヴァン・パーヴロヴィッチ、前掲論文。

14) ミラディン・コーラッヂ、前掲論文。

とあらわれはじめた点である。……自主管理的社會主義社会の政治経済学の研究対象とは、諸関係のなかで自主管理的生産諸関係がすでに支配的となっているようなできあがったシステムとしては、まだ実践上（したがってユーゴスラヴィアにおいても）存在していない生産様式である……。」<sup>15)</sup> すなわち、自主管理的生産諸関係は、まだ支配的にはなっておらず、それゆえに、社会主義的自主管理生産様式は実践上はどこにも存在していないとはい、すでに識別されはじめている。しかし、ユーゴスラヴィアの実践では、自主管理的生産諸関係はそれでもやはり存在しているのだから、コーラッヂにとっては、PESAMO を構成できるか否かのジレンマはないのである。

要約しよう。シューヴァルによれば、首尾一貫した PESOC はありえない。というのも、社会主義が首尾一貫した社会ではないからである。ジャルコヴィッチによれば、社会主義的自主管理的生産様式は存在しない、ということは PESAMO も存在しえないということである。他方で、パーヴロヴィッチとジャルコ・パーピッチの考えでは、社会主義的自主管理は社会主義発展の法則であり、ということはつまり、PESAMO は可能であるということである。

以上とりあげた理論家全員に共通しているのは、PESAMO の構成可能性は、この学問の研究対象を規定できるか否かと結びついているということである。

PESAMO が問題となる場合、それがマルクス主義的世界観から、とくに科学としての政治経済学に対するマルクスの態度から出発すべきであるという点でジレンマはない。しかしながら、マルクスの政治経済学への態度はどのようなものかという間に答えなければならないすると、問題や見解の食い違いが生まれてくる。より具体的にいえば、マルクスの政治経済学に対する態度は、ブルジョア政治経済学と資本主義的生産様式に対する批判を提示するだけなのか、

15) ミラディン・コーラッヂ『社会主義的自主管理的生産様式』、第 I 卷32、38頁、コムニスト社刊、1977年。

あるいは批判とともに、実証的な意味で体系と科学としての政治経済学が基礎にあるのかという問題が提起されている。このうちどれをとるかに、PESAMO の構築可能性もかかっている。なぜなら、マルクスのもとでは単に批判が問題となっているとした場合、首尾一貫したマルクス主義者であろうとすれば、PESAMO を構築することはできないだろう。だが、批判とともに、マルクスは実証的な意味で基礎づけられた政治経済学を提供しているとすれば、PESAMO を構築することができるはずだ。ごく手短に言って、理論家たちは、マルクスの政治経済学に対する態度をバラバラにちがって理解しているために、PESAMO の構成可能性にたいしてバラバラな態度決定をすることになっている。

バラバラな態度決定の第2の理由は、PESAMO の研究対象を規定する可能性をバラバラに理解しているからである。この学問は対象をもつと考えているものにとっては、PESAMO は可能なのであって、そうでないものにとっては可能ではないのである。

## 1. 政治経済学にたいするマルクスの態度についての見解

### 1.1. 政治経済学における実証主義者としてのマルクス

実証主義とは、実証的なもの、事実にもとづくもの、経験によって与えられるものだけが出発点となるような哲学と科学における方向を意味する。実証主義は、その研究と叙述を、あらゆる形而上学的方法を不要で無益なものとして投げ捨てておこなう。これは実証主義という名称をつくったO.コント（1798-1857）の哲学・社会学の学派であり、この学派は形而上学を拒否し、人間の知識を関係、法則そして数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学といった実証科学に限定する。

実証主義はイギリスの経験主義哲学にも根をもっている。とくにヒュームの懷疑論と、「われわれが知覚する対象の『向こうに』はあるいはそれを『超越する』ようなものはなにも存在しない」という彼の言明にみられる。実証主義に

とって、認識の限界を規定するのは事実にたいする知識であるが、それは経験的で実験的な探究の結果でなければならない。その意味で、科学は言語的表現や合理的思考に立脚することはできない。

実証主義にとっての出発点はあるがままの事実であり、それは人間の知識を諸法則と諸関係だけに限定するものであり、それにとっては知覚の対象の「向こうに」はあるいはそれを「超越する」ものはなにもない。そのような科学の一方向としての実証主義に対してきわめて鋭くかつ痛烈な批判を放っているのは、ジエロ・シューシュニッチである。「実証科学の方法は、モノとしてふるまう、あるいはモノの際だった特徴をもつような現実にだけ適用できるものである。実証的な方法が、人格として、主体としての人間を軽視するのは自然の成り行きである……。実証科学はみずからの方法を研究対象の性質に適合させるのではなく、まったくそれとは反対のことをなす。つまり、現実のほうを方法に適合させている。こうして、結局のところ、人間的現実をやせ細らせて、モノに還元してしまう。なんとなれば、モノというのはそのような方法でも認識はできるからである……。実証科学を批判しなければならないのは、それが批判を拒むからである。もし科学が現存の諸事実の秩序の受動的な関係だけに限定されるならば、科学はあれやこれやの方法でこの秩序を把握するとしても、この事実が組織される別のどんな可能性も洞察することはできない。」<sup>16)</sup>

政治経済学はどうか。政治経済学は実証科学でなければならないか？ 科学としての政治経済学にとって、実証的で、事実にもとづき、経験によって与えられるものだけが出発点か？ 政治経済学が研究する現実とはモノであるか、すなわち、社会的諸関係はモノであるのか？ 人間はその社会的諸関係において無視できるものか？ 政治経済学の方法は研究対象の性質に適合させなければならないのか、あるいは現実

16) ジエロ・シューシュニッチ『花と土』、NIRO 「ムラドスチ（青年時代）」社、ベオグラード、1982年、72、74頁。

のほうが方法に適合させられなければならないのか？ 政治経済学は、社会的諸関係における諸事実の現存の秩序を把握するのであって、そうした事実が別様に組織される可能性を見てはならないものなのか？

アレクサンダル・ヴァーツィッヒの考えによれば、「政治経済学において実証的という言葉は、無批判的とか静態的とかということをすこしも含んでいない。」<sup>17)</sup>もし政治経済学において「実証的」という用語が批判的および非静態的性格を意味するものとすれば、実証的科学は問題にならないのである。

ブランコ・ホルヴァートは、「実証的で批判的な政治経済学に関する議論は、かなりの程度意味論的な問題によって負荷をかけられている」<sup>18)</sup>と考える。彼にとって実証的理論とは何を意味するのか？「本来の意味では、何ものかにたいする実証的アプローチと実証的理論とは、事実性へ、存在するものへ依拠することをいう……。」<sup>19)</sup>ホルヴァートはヴァーツィッヒとは違って、「実証的であるとは構成的であることを意味する」<sup>20)</sup>と結論づける。したがって、批判的性格や非静態的性格をもたないのであり、それというのも、実証的アプローチとは事実性への依拠を意味するからである。

俗流経済学にとってはジレンマはない。それは諸事物の現存秩序を弁護論的に擁護し、それを永遠のものであると宣言する。出発点は実証的で事実にもとづくものである。社会的諸関係は、人間が無視されているようなモノであり、別様の組織の可能性はみえない。なぜなら、これはすべて支配するブルジョア階級に対応するものだからである。しかし、マルクスが科学としての政治経済学に対してどのような態度をと

ったのかを明らかにしなければならなくなると、問題がでてくる。マルクスは資本主義的生産様式とそれを正当化したブルジョア経済学を批判した。そのことはほとんどだれも疑問としていない。議論を呼び起こすのは、批判とともに実証的な意味でマルクスは資本主義の政治経済学をも構築したのかどうかの評価に際してである。マルクス自身はこの点についてどのように言っているだろうか？

マルクスは1868年10月10日付のエンゲルス宛手紙のなかで次のように述べている。「たまたま僕はある小さな古本屋でアイルランドの借地権に関する1867年の報告と証言（上院）を見つけて。これはほんとうの掘り出し物だった。経済学者諸君が、地代とは土地の自然的な相違にたいする支払いであるか、それとも土地に投ぜられた資本にたいするたんなる利子であるか、ということを純粹な学説論争として論じているときに、われわれはここに借地農業者と地主とのあいだの生死を賭けたじっさいの闘争を見るのだ。すなわち、どの程度まで地代は、土地の相違にたいする支払いのほかに、地主によってではなく借地農業者によって土地に投ぜられた資本の利子をも含んでいるべきか、ということについての闘争を見るのだ。ただ、相争う学説のかわりに相争う諸事実とそれらの隠された背景をなしている現実の諸対立とを置くことによってのみ、経済学をひとつの実証的な科学に転化させることができるのだ。」<sup>21)</sup>

この手紙でマルクスは、そこでは諸事実が相争わされているような政治経済学に支持を与えている。

その「経済学批判」の粗描（グルントリッセ）を執筆中に、この労作の内容について、1858年2月22日付でラサールに次のような手紙を書いている。「さしあたり問題となっている仕事は、経済学的諸範疇の批判だ。言い換えるならば、ブ

17) アレクサンダル・ヴァーツィッヒ「実証的なマルクス主義の政治経済学は可能か、ないしは、実証的な社会主義経済学は可能か」、①, No. 8, 1975, 134頁。

18) ブランコ・ホルヴァート「無階級社会についての経済科学が社会主義政治経済学である」、①, No. 8, 1975, 135頁。

19) 同上。

20) 同上。

21) 邦訳マルクス・エンゲルス全集〔以下たんに全集と記す〕第32巻143-144頁。なお、マルクスの著作からの引用については、邦訳の全集もしくは上製版『資本論』における該当個所のみを記し、著者の引用もとであるセルビア語文献は記さない。

ルジョア経済学の体系を批判的に叙述することだと言ってよい。それは同時に体系の叙述でもあり、また叙述によるその批判でもある。」<sup>22)</sup>弁証法について語りながら、マルクスは次のように言っている。「その神秘化された形態で、弁証法はドイツの流行になった。というのは、それが現存するものを神々しいものにするように見えたからである。その合理的な姿態では、弁証法は、ブルジョアジーとその空論的代弁者たちにとっては、忌まわしいものであり、恐ろしいものである。なぜならば、この弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的な側面からとらえ、なにものによっても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的であるからである。」<sup>23)</sup>

上記の二つのマルクスからの引用にもとづいて、M・コーラッチは次のように考える。「マルクスの『資本論』は実際のところ、資本主義的生産様式についての科学的な総体的認識としての、資本主義社会のマルクス主義的政治経済学（すなわち資本主義的生産様式の「肯定的理解」－引用者）を意味している。この経済学は資本主義的生産様式を永遠のものと考えない。そうではなく、歴史的に過ぎ去る生産様式（「その否定的理解」－引用者）として理解している。」<sup>24)</sup>先の命題と同じように、コーラッチは次のように結論づけている。「実際に社会主義的自主管理生産様式の『肯定的理解』、それによって『その否定的理解』に到達したならば、……」<sup>25)</sup>社会主義的自主管理社会の政治経済学が創造されるだろう。

したがって、資本主義的生産様式にたいする批判とならんで、「『資本論』では実証的意味で資本主義のマルクス主義的政治経済学が展開されており」<sup>26)</sup>、そこからコーラッチは、社会主義的

な自主管理的生産様式の肯定的理解を、すなわち社会主義的な自主管理的社会の実証的政治経済学を支持しており、この経済学は同時に社会主義的な自主管理的生産様式の「否定的理解」も提示している。

A・ヴァーツィッチは自問する、「……はたしてマルクスの著作には、実証的経済学の要素、すなわち PESOC の要素があるのかどうか。……一般的評価によれば『ゴータ綱領批判』で、マルクスは資本主義（の政治経済学）の批判から社会主義経済と社会主義的な社会経済システムの実証的規定の方向へはっきりと歩み出た。」<sup>27)</sup>この意味で、ヴァーツィッチは次のように結論づける。「実証的な PESOC は必然的である。」<sup>28)</sup> A・ドラギュエヴィッチも同様な意見である。「新しい社会の機構と組織についての、その肯定的な方向づけ、および生産と交通の将来的な諸関係についての古典の理解が（マルクスの著作から－引用者）引用され、できる限り体系的に叙述されるならば、その場合にはそうした部分には批判という表現を当てはめることはできないだろう。」<sup>29)</sup>

ドラグティン・レコヴィッチは、ヴァーツィッチやドラギュエヴィッチのこのような理解に対して最良の批判をおこなっている。「……マルクスは……未来の大衆簡易食堂について議論して時間をつぶしているようなものすべてを、とりわけ実証主義者たちを批判した。」<sup>30)</sup>

「マルクスは、人間は不合理な社会に生きている、という一つの合理的な前提から出発した。こうした不合理で非人間的なすべての関係の集合をマルクスは疎外と呼んだ。疎外された世界で実証的な科学はどのような位置を占めているか？ 実証的な科学はこの世界の諸事実を記録

政治経済学をどのように創造すべきか」、①、No. 8, 1975, 143頁。

27) アレクサンダル・ヴァーツィッチ、前掲論文、132頁。

28) 同上。

29) アドルフ・ドラギュエヴィッチ「批判的および創造的な政治経済学」、②、No. 6, 1976, 74頁。

30) ドラグティン・レコヴィッチ「労働の経済学による所有の経済学の克服」、①、No. 8, 1975, 142頁。

22) 全集第29巻429-430頁。

23) 『資本論』第一巻「あと書き〔第二版への〕」、新日本出版社、上製版 Ia [以下巻号のみを記す] 23頁。

24) ミラディン・コーラッチ、前掲書、第 I 卷20頁。

25) 同上。

26) ミラディン・コーラッチ「自主管理社会主義の

し、それを分類し、測定し、説明し、照らし合わせ、予測し、方向づけ、計画する。それはひとつ物象化された世界の現実のイメージである。ひとつの虚偽の世界の真実の像である。……社会的生活の生産様式が転倒したものであれば、実証的な観念はそのような生活を記録するだけである……疎外された世界では、実証的な科学はそのような世界を記録するのだから、必然的に疎外された意識である。」<sup>31)</sup>

マルクスが自分の著作を、人間は疎外された世界に生活し、そして、その世界では社会的生活の生産様式が転倒している、という認識に立脚して書いていることは議論の余地がない。もしマルクスがこの世界を、社会的生活の転倒した生産様式として分類し、測定し、説明し、照らし合わせ、そして記録したというならば、彼は、物象化された世界の現実の姿をすでに描写していた資本主義のブルジョア的俗流政治経済学から一歩も先には進んでいないことになる。

マルクス主義のもっとも著名な思想家の一人であるカール・コルシュは、マルクスの思想の忠実な解釈に大いに貢献したが、おそらくはもっともはつきりとそして非常に精力的に正反対の見方を支持している。「マルクス主義は、これまでの（ブルジョア的な）哲学の代わりに新しい『哲学』を、これまでの（ブルジョア的な）歴史学の代わりに新しい『歴史学』を、これまでの（ブルジョア的な）法および国家学説の代わりに新しい『法および国家学説』を、あるいは、今日のブルジョア的科学論が社会の学としてのべている未完成の形成物の代わりに新しい『社会学』をおこうとしたことを論拠とするブルジョア的また半社会主義的な学者の観念は、すべてまったくまちがっている。……カール・マルクスは、そのかわりに、目的として、ブルジョア哲学の『批判』、ブルジョア的歴史学の『批判』、ブルジョア的『精神科学』全体の『批判』、一言でいえばブルジョア・イデオロギー全体の『批判』をもってきた—そして彼は、このブルジョア『イデオロギー』の批判を、ブルジョア

『経済学』批判とまったくおなじように、プロレタリア階級の立場からくわだてた。」<sup>32)</sup>

この立場に Z・プホヴスキイは合流する。「マルクスが問題にしていたのはまさに政治経済学の批判であって、なにか新しい経済科学を発明することではない—彼の著作や解釈がそのことをはっきりと示している—、ということから出発するならば、マルクス主義ではどこから実証的な政治経済学について語りうるのかは必ずしも明白ではない。」<sup>33)</sup>

PESAMO は実証科学であってはならない。なぜなら、この科学の「出発点になっているのは、たんに実証的で、事実にもとづいて、経験で与えられたものではない。」現実すなわち考察の対象である現存の社会関係はモノではなく、人々が構築し、不断の変化の過程にある諸関係のシステムなのである。それゆえに、PESAMO はそうした社会的諸関係のなかで人間を無視できないのである。PESAMO の方法は、考察されるものの性質に適合させられなければならないのであって、現実が方法によって適合させられるのではない。PESAMO は社会的諸関係の諸事実の現存秩序を受容してならないのであり、というのもこのような関係は疎外された世界をあらわしているからである。そうしないと、事実を別に組織する可能性を考えることができなくなり、ブルジョア的俗流経済学や古典派経済学がそうであったような弁護論に転化してしまうことになる。

## 1.2. 政治経済学における批判者としてのマルクス

批判という言葉は、ギリシア語の *kritike* に由来し、判断、判断力を意味する。すなわち、（文学、科学、公共生活などにおいて）善なるものもしくは価値あるものを確定し、それを悪なるものもしくは価値のないものと区別するこ

32) カール・コルシュ『マルクス主義と哲学』、コムニスト社刊、ペオグラーード、1970年、86頁（石堂清倫訳同書、153-154頁、三一書房、1975年）。

33) ジャルコ・プホヴスキイ、②、No.5、1976、34頁。

31) ジューロ・シューシュニッヒ、前掲書、79頁。

とである。

批判という言葉は、さまざまな現象を問い合わせ評価する能力を意味する。よいものと悪いものを区別する能力である。したがって、批判は考察対象の否定的側面だけを強調するものではなく、全体を包摂しなければならない、したがって肯定的側面をも包摂しなければならない。自己の存在のさまざまなアスペクトに対して批判的にかかわらないような人間は、動物もしくは機械の世界に特徴的である精神的な荒野のなかで生きているようなものだ。

社会的本質を問い合わせることを対象とするあらゆる思想に対しては、批判的なアンガージュマン〔闇与〕を提示せよという避けて通れない要求が提起されているのである。無批判な思想は、認識の基礎とはなりえない。批判のないところには、行動も創造性もない。「伝統的にギリシア人からとった定義づけは、批判を技能として (kritike tehne) 理解している。科学、芸術、哲学の批評の場合、それはそれ自体では科学でも、芸術でも哲学でもない。」<sup>34)</sup>

PESAMO の場合はどうであろうか？ PESAMO は評価、すなわち善なるものもしくは価値あるものを確定したり、それを悪いものもしくは価値のないものと区別したりすることを表現しているのだろうか？

マルクスの著作も批判であるという認識にもとづいて、PESAMO が批判となることを支持している研究者がもっとも多い。

プホヴスキーは次のように強調している。「社会主義における諸事象の批判的政治経済学的な分析は不可欠であり、このような分析はもちろん、マルクスが与えた政治経済学の批判の基本的諸カテゴリーから出発しなければならない。」<sup>35)</sup> プホヴスキーは、マルクスは政治経済学の批判をあたえたのだというテーゼから出発して、彼の批判的諸カテゴリーにもとづいて、社

34) ジャルコ・プホヴスキー「批判の主体」、『マルクシスティチュカ・ミサオ（マルクス主義思想）』誌、No.5, 1982, 147頁。

35) ジャルコ・プホヴスキー「社会主義における政治経済学の対象について」、①、No.8, 1975, 141頁。

会主義における諸事象の批判的政治経済学的な分析を確実におこなわなければならない、と考える。

イワン・クワチッチは、「……マルクスは政治経済学を書かなかったばかりでなく、何かそういったものを書くつもりは全くなかったのである。彼が書いたのは、政治経済学批判であり、それをその主著の副題にはっきりと掲げたのである。」<sup>36)</sup>

ドラギェヴィッチは次のように評価する。すなわち、「批判的という表現の強調は、この学問分野のかの重要なアспектを完全に捨て去るのと同じように、一つの極論である。」<sup>37)</sup> かの重要なアспектとは次のドラギェヴィッチの評価に含まれている。つまり、「より十全にとらえるならば、マルクスの諸著作で支配的なのは、ブルジョア的体制の批判であり、そうした体制についての一重商主義者から俗流経済学者そしてユートピア社会主義者に至る一すべての把握に対する批判であり、そして議論の対象となっているシステムの破壊としての批判である。」<sup>38)</sup> ドラギェヴィッチは先の議論と同じように、次のテーゼを引き出している。PESOC は、「自分の研究対象により果敢に近づくために、他の学問分野により頼らなくてすむように、逸脱と歪曲に立ち向かうために、そして研究と叙述のマルクス主義的方法をより一貫して適応させるために、自分に対して、その方向づけ、その姿勢や到達点に対して、はるかに批判的にならなければならない。」<sup>39)</sup> だが、ドラギェヴィッチはただ批判だけを強調して極端に走らないよう、次のように付け加えている。「たしかにマルクス主義的政治経済学は、それが弁護し、それが生まれてくる世界の実践に対して批判的であることができるし、そうあらねばならない。だが、自分自身の要求と提案の批判ではありえ

36) イワン・クワチッチ「政治経済学の批判と社会学の批判」、②、No.5, 1976, 45頁。

37) アドルフ・ドラギェヴィッチ、前掲論文、73頁。

38) 同上。

39) アドルフ・ドラギェヴィッチ「わが国の政治経済学の状況と諸課題」、③、No.9, 1981, 1393頁。

ない。なぜならば、批判は、それが攻撃対象とするもののオルタナティヴ、代案を提供する場合にだけ科学的なのだからである。つまり、法則的に生起しつつある明日を予想する場合にしか科学的でない。」<sup>40)</sup> はたして批判は、それが攻撃対象とするもののオルタナティヴを提供しなければならないのであろうか？ この問題に対してわが国の理論界では、反対的回答が多い。

B・ホルヴァートは次のように考える。「ある状況に対する不満が表現されるだけで、その先に進まないとすれば、その批判は明らかに破壊的なものであり、そして、それはその状況の破壊に向けられてはいても、なにか新しいものの建設には向けられていない。」<sup>41)</sup> プホヴスキーは次のように強調している。「批判を問題にする場合、批判が破壊的であるとはどういうことかについて付け加えたい。……なにか無意味なもの、破壊的な批判というのは、よく考えると存在しないのである。あらゆる批判は必ず建設的であり、『なにもかもほしくない』という批判でさえもそうなのである。こうした批判も、政治的にも、哲学的にも、『イデオロギー的に』も建設的なのである。なぜならば、一定の政治的態度を提起し、仮定し、もしくは前提としているからである。それゆえに、破壊的批判という呼称は、思うにイデオロギー的魔法使いである。このような魔法使いは、あれこれの時に利用できるが、実際上は方法論的に存在しないものである。これやあれについて我々は満足していないと語るような批判はどんなものでも、すでに理論的には何か別のものなのである。」<sup>42)</sup> プホヴスキーは7年後にも、この姿勢で首尾一貫しており、「すべての、いわゆる破滅的な批判でさえも、まず価値判断の基準を打ち立てるし、思考のための方向づけも打ち立てる……。」<sup>43)</sup>

政治経済学にたいするマルクスの態度にもと

40) アドルフ・ドラギュエヴィッヒ、前掲「批判的および創造的な政治経済学」。

41) ブランコ・ホルヴァート、前掲論文。

42) ジャルコ・プホヴスキー、前掲「社会主義における政治経済学の対象について」。

43) ジャルコ・プホヴスキー、前掲「批判の主体」、150頁。

づき、PESAMO が批判となることに賛成する研究者は皆、マルクスの著作はたんに批判であるという評価に同意する。しかしながら、コーラッヂとドラギュエヴィッヒは、マルクスの著作は批判とともに、実証的な意味においても構築された政治経済学をあらわしていると考える。それゆえに、批判的志向とならんで、コーラッヂにとっては、PESAMO は社会主義的自主管理的生産様式の「実証的理説」とならなければならず、ドラギュエヴィッヒにとっては、「社会主義的に実証的に方向づけられた科学」<sup>44)</sup> という性格ももつべきである。

他方で、プホヴスキーとクワチッヂにとって、マルクスの著作はもっぱらブルジョア政治経済学と資本主義的生産様式の批判をあらわしている。その意味で、資本主義の実証的なマルクス主義的政治経済学は存在せず、したがって実証的な PESOC の構築も不可能であり、可能となるのは、プホヴスキーの言うように、ただ「社会主義における事象の批判的政治経済学的分析にすぎない」。

### 1.3. 政治経済学における実証主義者かつ批判者としてのマルクス

マルクスの政治経済学に対する態度にもとづいて、自主管理社会主義の政治経済学は実証的であると同時に批判的でもなければならない、と考える研究者がいる。

例えば、ブランコ・ホルヴァートは次のようにいいう。「『資本論』の副題が政治経済学批判だということはよく知られている。わが国の似非マルクス主義者は言う、普遍的な自主管理に立脚した無階級社会として建設された社会主義が未だ存在していない以上、その批判はありえず、したがって、マルクス主義的政治経済学も存在しない、と。他方で、PESOC が自分の対象である社会主義経済といっしょに発展する科学として理解するならば、またその発展の経験的な諸事実から出発するならば、問題となるのはまたもやマルクス主義的ではない実証主義であろう。」

44) アドルフ・ドラギュエヴィッヒ、前掲「わが国 の政治経済学の状況と諸課題」。

このような概念上の混乱からの出口を見つけだすことは難しくはないだろう。

あらゆる科学は確かめられる経験的諸事実から出発する（そうでなければ、それは宗教、芸術、幻覚あるいは何か別のものを表現するのであり、科学を表現するのではないからである）。そしてその意味で、政治経済学は実証的である。だが、マルクス主義の社会科学は一般的に、したがって政治経済学も、事柄の状態をたんなる外生的にあたえられたものであり、不变のものであるとはみなさい。この科学は、同様に、可能なオルタナティヴ、現にある状況の克服の可能性、簡単にいって意識的な社会的活動の可能性を検討するものである。その意味で、PESOC は批判的である（ないしはそなならなければならぬ）。」<sup>45)</sup> ホルヴァートは解決を、「実証的」や「批判的」という用語の使用を回避することに見いだした。彼は、「PESOC はただ単純に科学的な政治経済学になるべきだ」<sup>46)</sup> と提案する。

ホルヴァートによれば、マルクス主義政治経済学は批判もふくんでいる。しかし、マルクス主義政治経済学は実証的に構成された科学を意味するとしても、あるものにたいする批判はそれ自体では科学ではない。ホルヴァートにとって、PESOC は実証主義である。なぜなら、それは検証可能な経験的諸事実から出発し、その対象たる社会主义経済といっしょに発展すべきものだからである。ここでホルヴァートは、「自主管理的生産様式についての最初の科学的認識に、その『実践』における生成ならんで、たどり着かなければならぬ」<sup>47)</sup> と考えるミラディン・コーラッチの立場に接近している。PESOC はただ単純に科学的な政治経済学になるべきだという提案のなかに、ホルヴァートの実証主義へ

45) ブランコ・ホルヴァート「社会主义経済学に関する討論によせて」、③、No.9、1980、50、51頁。

46) ブランコ・ホルヴァート、前掲「無階級社会についての経済科学が社会主义経済学である」、137 頁。

47) ミラディン・コーラッチ、前掲「自主管理社会主義の政治経済学をどのように創造すべきか」、145頁。

の傾きが感じ取られる。

ドラギチェヴィッチも同様に次のように考える。「……マルクスの理論は、たんに現存のものの破壊ではなく、それは同時に—それがずっとわずかではあっても—来るべきものの創造、ヴィジョン、予測でもある。マルクスはブルジョア的秩序の、市民的経済学の、ユートピア社会主義の批判者であるが、同時に、彼は新時代の精神的父、その本質的特徴の創造者、支配的な諸矛盾を克服する必要性と可能性とを実証的に叙述している理論家である。したがって、彼はその批判者であるというのではなく、弁護者なのである。

パリ・コミューンのある機会に、マルクスの世界プロレタリア革命の考えがつくられたとすると、彼はその新しいシステムにおいてはもはや批判者ではありえないのあって、むしろプロレタリアートの精神的指導者であり、新しい社会的諸関係のシステムの創造者なのである。その新たなる社会的機構を描写し分析した著作は、『批判』という題あるいは副題をもたないであろう。とはいって、その中には実践とそれをもくろむ理論の批判的評価や非難もあるにちがいないのだが。だが、重心は別のところに、新しい社会的時代の政治経済学の創造者としての、クリエイティヴな、先回りする人の役割にあるだろう。」<sup>48)</sup>

パリ・コミューンの勝利によって、そして世界プロレタリア革命によって、マルクスが新しい社会的諸関係のシステムの精神的指導者と創造者になるだろうと考えるのは、今日でいえば、キリスト教的な人類の全面的な救済と再生がやってくるならば、キリストは新たなる人類の精神的指導者となる、と考えるのと同じことである。マルクスが、未来の大衆簡易食堂の議論にふけっているものすべてを、とくに実証主義者を批判したのは、おそらく正しかっただろう。

上で言及した理論家、つまりコーラッチ、ホルヴァート、ドラギチェヴィッチの三人が三人とも、違った仕方ではあるが、マルクスの著作

48) アドルフ・ドラギチェヴィッチ、前掲「批判的および創造的な政治経済学」、77頁。

とりわけ『資本論』のなかでは実証主義の要素も批判の要素も見いだされるので、PESAMOは実証主義かつ批判でもなければならないとしている。しかしながら、実証主義が問題となる場合には、プホヴスキーの言うように、『資本論』のどこで商品、市場あるいはその他のものが実証的に問題とされているかを示すべきであろう。だがそれはとても難しいことであり、ほとんど不可能に近いのではないか。なんとなれば、「マルクスにとって事実とはなにか実証的な仕方で存在しているものだけでなく、事実あるいは事実の組織のなかに含まれている可能性を妨げ、制限し、拒絶している何ものかでもあるからだ。賃労働は事実であるが、それは同時に自由な労働の否定でもある。私的所有は事実であるが、それは同時に人間の共同した自然の取得を制限するものもある……。」<sup>49)</sup>

## 2. 自主管理社会主義の政治経済学 (PESAMO)の研究対象を定義 できるかどうかについての見解

「……思うに、マルクス主義的なアプローチとは、あらゆる科学にとっても政治経済学にとっても同様に、その対象が存在するのかどうかを問うところまでいかなければならないことである。」<sup>50)</sup>また、ミラディン・コーラッチは、自主管理社会主義社会の政治経済学は「それが科学であるかどうかは、何よりも世界のどこかでその研究対象となるようなものが存在しているかどうかにかかっている」<sup>51)</sup>と強調する。

イワン・マクシモヴィッチは、PESOCの対象を、「最も一般的な意味では、社会主義の経済構成体である」<sup>52)</sup>という定義を示す。ブランコ・ホルヴァートもその意味で、「社会主義が存

49) ジューロ・シューシュニッチ、前掲書、76頁。

50) ジャルコ・プホヴスキー「社会主義における政治経済学の対象について」、①、No.8、1975、138頁。

51) ミラディン・コーラッチ「自主管理社会主義の政治経済学をどのように創造すべきか」、①、No.8、1975、114頁。

52) イワン・マクシモヴィッチ「社会主義経済学の対象と内容」、『ナーシェ・テーマ（われわれのテーマ）』誌（以下④と略す）、No.5、1966、884頁。

在するもしくは存在しうるならば、PESOCは存在するだろうし、したがって構築できるだろう。」<sup>53)</sup>簡単にいえば、もし社会主義が存在するならば、政治経済学もあるが、社会主義が存在しないのならば、この学問もないだろう。したがって、「……はたして社会主義と呼べるもの、社会主義経済、社会主義社会およびそれと同類のものが存在するのかどうか？」<sup>54)</sup>という問い合わせてくる。「社会主義が存在するかどうか？」の問題に答える前に、まず社会主義とはそもそもなにかを見よう。マルクスはそれについてどのように言っているのだろうか？

「生産手段の共有を土台とする協同組合的社會の内部では、生産者はその生産物を交換しない。同様にここでは、生産物についやされた労働が、この生産物の価値として、すなわちその生産物の有する物的特性としてあらわれることもない。なぜなら、いまでは、資本主義社會とはちがって、個々の労働は、もはや間接ではなく直接に、総労働の構成部分として存在しているからである……。ここで問題にしているのは、それ自身の土台のうえに発展した共産主義社會ではなくて、反対にいまようやく資本主義社會から生まれたばかりの共産主義社會である。したがって、この共産主義社會は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、それが生まれてきた母胎たる旧社會の母胎をまだおびている。」<sup>55)</sup>

マルクスはどんな社會を問題にしているのか？ 自身の固有の土台をもたない社會を問題にしているのである。というのも、それは資本主義社會から抜け出たばかりであり、あらゆる点で、古い社會の痕跡を残している。すべてこれは我々の現在の社會の特徴である。しかしながら、マルクスはこうした特徴を共産主義社會としているが、わが国では社会主義と呼んでいる。明らかに問題は用語上のことであって、本

53) ブランコ・ホルヴァート「社会主義経済学に関する討論によせて」、③、No.9、1980、45頁。

54) アレクサンダル・バイト「科学としての社会主義経済学」、④、No.4、1966、737頁。

55) 『ゴータ綱領批判』、全集第19巻19-20頁。

質的な点でのちがいはない。問題は社会主義である。しかし、マルクスにとっては、すでに社会主義において、生産者はその生産物を交換しない<sup>56)</sup>。そして、ついやされた労働は価値としてあらわれない。したがって、これがマルクスにとっての社会主義である。わが国にはこのような社会主義が存在しているか？

「今日社会主義経済とわれわれが呼んでいるのは、実際のところ社会主義的生産様式を形成しようとする諸試行である。」<sup>57)</sup>「……普遍的な自主管理に立脚した無階級社会として構築された社会主義は、いまだ存在していない。」<sup>58)</sup>「自主管理社会主義は何らかの社会システムとしても存在していないとおもう。」<sup>59)</sup>社会主義経済と社会システムとしての自主管理社会主義が存在していないとすれば、PESAMO はその研究対象を失うことになり、その場合には PESAMO が科学として構成される可能性もないということになる。「先駆的に社会主義の政治経済学だと資本主義の政治経済学だとと呼ぶことはできない。こうした呼称は、具体的な経済における諸関係が資本主義的であるとか社会主義的であるとかと確定されてはじめて冠することができる。」<sup>60)</sup>

しかし、Ž・プホヴスキーは、社会主義における政治経済学も自分の研究対象を有しており、「その対象は依然として本質的には不变のままである……」<sup>61)</sup>とさえ考えている。プホヴスキーにとって、社会主義における政治経済学の対象とは、現にある実践、すなわち現存の社会的諸関係である。これらの社会的関係は資本主義との関係で考えてみると、おそらくは社会主義においても本質的に変化したわけではなかった。プホヴスキーやその他の理論家たちは、経済的社会構成体を念頭におく先の理論家たちとは違

56) ジャルコ・プホヴスキー、前掲論文。

57) アレクサンダル・バイト、前掲論文。

58) ブランコ・ホルヴァート、前掲論文、50頁。

59) スティーペ・シューヴァル「社会主義は過渡期の社会である。それは資本主義でもあり共産主義でもある。」、①、No.8、1975、150、150頁。

60) アレクサンダル・バイト、前掲論文、738頁。

61) ジャルコ・プホヴスキー、前掲論文。

って、様々な仕方ではあるが、現存の社会的諸関係が PESAMO の対象であると考えている。

コーラッチの考えでは、自主管理社会主義社会の政治経済学の研究対象は、以下の関係の定式化されたシステムとしての生産様式である。

- 1) そこでは自主管理的諸関係が支配的である。
- 2) 社会的再生産の過程における労働者の連合と相互の結合が規定的特徴をなしている。
- 3) こうした生産様式は実際のところは、ユーゴスラヴィアにおいても存在しておらず、その生産様式の政治経済学としても生成の過程にある<sup>62)</sup>。

研究対象は存在しておらず、それを対象としている科学と一緒に構築されつつあるのである。コーラッチは別のところで、「ユーゴスラヴィアは、その経済システムにおいて、労働者の自主管理の実践が発展することで、自主管理的生産諸関係の区別を生じさせ、そして、他の生産諸関係と差異を認められるような若干のその本質的特徴をはっきりとあらわしはじめた、今のところ唯一の国である」<sup>63)</sup>と述べている。

上の引用やコメントにもとづいて次のように結論づけることができる。すなわち、コーラッチにとって、自主管理社会主義社会の政治経済学の対象をなすのは、労働者の自主管理的実践が展開されるにつれて区別を生じさせはじめた自主管理生産関係である。政治経済学は、「その認識が、自主管理的生産様式を実現する方向へ向けて、既存の社会的実践をより速く変化させることに役立つかぎりでその場合にのみ、社会的に正当化される……。」<sup>64)</sup>だから、政治経済学は、その端緒的対象にもとづいて、すなわち、自主管理の実践によって区別を生じさせはじめた自主管理的生産諸関係にもとづいて、自分の科学的認識によって、社会的再生産過程における自主管理的諸関係と労働者の相互の結合が支配的なものとなるように貢献すべきである。そうすることで、諸関係の定式化されたシステム、すなわち自主管理的生産様式が構築される

62) ミラディン・コーラッチ、前掲書、第Ⅰ巻38頁。

63) ミラディン・コーラッチ、同上書、32頁。

64) ミラディン・コーラッチ、前掲論文、145頁。

であろう。

コーラッチにとって、PESAMO の研究対象は以下の二つの部分からなる。

1) 労働者の自主管理的実践の発展とともに区別を生じさせはじめた自主管理的諸関係。2) 自主管理的諸関係についての、つまり、まだ実践においては存在しない自主管理的生産様式の支配特徴としての、社会的再生産過程における労働者の連合と相互の結合についての科学的発見。

D・ジャルコヴィッチのみるところでは、コーラッチが自主管理社会主義的生産様式と理解しているのは、共産主義的生産様式であり、それはわが国にとってそして全人類にとってもはあるか彼方のものである。こうした主張に、コーラッチもある程度賛同するであろう。というのも、このような生産様式は彼にとっても存在していないのだから。違う点は、コーラッチによれば、PESAMO の対象には科学的発見もあって、それは自主管理社会主義的生産のいっそうの発展に寄与しなければならないものである。他方、ジャルコヴィッチは政治経済学の対象は、具体的な経済的社会構成体でなければならないと考えている。

ジャルコヴィッチによれば、社会的再生産過程での労働者の連合と相互の結合は社会主義では不可能であり、それゆえにそれは PESAMO の研究対象ではありえない。つまり、その研究対象を、社会的再生産過程における労働者の連

合と相互の結合とするような PESOC も不可能である。コーラッチにとっては、社会的再生産過程における労働者の連合と相互の結合はまだ現実ではないが、それは可能であり発展するものもある。政治経済学はその発展を理論的に弁証し、それによって促進しなければならない。

S・シューヴァルはジャルコヴィッチと似た立場である。彼は次のように強調する。マルクスはパリ・コミューンについての論稿で、「資本主義では利潤と地代の諸法則が自然発的に作用するが、未来の社会では自由で連合した労働の経済の法則性が自然発的に作用するだろう」とあるところで語っている<sup>(訳注1)</sup>。資本主義の政治経済学についても、共産主義の政治経済学についても語ることはできるが、共産主義のそれは歴史的にはるか前方にある。だが、社会主義の政治経済学については、社会主義がことの本性に従えば存在するが、より正確に言えば存在しないという意味に限って語りうる。社会主義は、資本主義でもあり共産主義でもある。<sup>[65]</sup>

シューヴァルにとって、政治経済学の対象は、マルクスのいう意味での経済的社会構成体である。社会主義はそのような構成体ではなく、それがゆえに、PESOC はありえない。そうではなく、PESOC について語りうるのは、「社会主義がことの本性に従えば存在するが、より正確に言えば存在しないという意味に限ってである。」

---

65) スティーペ・シューヴァル、前掲論文。

(訳注1) 「現在の『資本と土地所有の自然諸法則の自然発的な作用』は、『奴隸制の経済諸法則の自然発的な作用』や、『農奴制の経済諸法則の自然発的な作用』の場合と同様に、新しい諸条件が発展してくる長い過程をつうじてはじめて、それを『自由な協同労働の社会経済の諸法則の自然発的な作用』とおきかえることができること……」  
 (『フランスにおける内乱』第一草稿、全集第17巻518頁)。